

信仰の弱い人、強い人

—教会の一致を保つために—

【聖書箇所】14章1～12節

はじめに

●今回は、教会内においてキリスト者同志がどうあらなければならないかを教えているところです。教会は様々な人々が集まっています。ですが、見解の相違、考え方の違いがあります。教会が新しい活動、あるいはプロジェクトを始めようとするとき必ずそれがあらわになってきます。教会建築などはその典型と言えるでしょう。そしてその見解の違いから、キリスト者同志の中にさばき合いが起こったりすることが少なくないのです。ローマ教会にも、信仰の強い人、弱い人がいて、それぞれの考え方、見解の相違、また習慣上の違いから、お互いにさばき合っていた現実があったようです。パウロはそのようなことは決して神の栄光にならないとして、問題の対処の仕方を述べています。ローマ教会に起こった問題は、その原則において、キリスト者が一致を保って生きる上で、きわめて重要な問題を提起しています。偏見は克服されなければなりません。教会間における、またキリスト者同志の争いや誤解の原因を考える時、状況は今日においても根本的には何ら変わっていないのです。そこで今回は、14章1節において、「あなたがたは信仰の弱い人を受け入れなさい」というパウロのことばで始まっていますが、信仰の弱い人、信仰の強い人とはどんな人を意味するのかということから考えてみたいと思います。

1. 信仰の弱い人、強い人とは

【新改訳改訂第3版】ローマ人への手紙14章1～4節

- 1 あなたがたは信仰の弱い人を受け入れなさい。その意見をさばいてはいけません。
- 2 何でも食べてよいと信じている人もいますが、弱い人は野菜よりほかには食べません。
- 3 食べる人は食べない人を侮ってはいけなし、食べない人も食べる人をさばいてはいけません。
神がその人を受け入れてくださったからです。
- 4 あなたはいったいだれなので、他人のしもべをさばくのですか。しもべが立つのも倒れるのも、その主人の心次第です。このしもべは立つのです。なぜなら、主には、彼を立たせることができるからです。

●ここでいう信仰の弱い人とは、一見、非常に良心的な人、几帳面な人のことですが、伝統とか慣習を重んじ、そこにこだわる人のことです。こだわりの強い人、これが信仰の弱い人です。ローマ教会には、食物のこと(食物規定)、日のことなどについて特別のこだわりを持っている人々がいました。特に、ユダヤ人のキリスト者がそうでした。キリスト者はイエシュアによって「律法の下ではなく、恵みの下にある」のですが、長い間、ユダヤ教的な慣習の下で育ってきた者たちにとっては、キリスト者になっても、律法主義的な考え方に陥りやすかったようです。ある者は「野菜だけを食べて」(2節)、「肉を食べず、酒を飲まない」(21節)、また、特定の日を重んずる人々がいました。これらはユダヤ教の律法主義的な考えに強く

影響されている者たちで、その回りの人々のことをパウロは「信仰の弱い人」と称したのです。とはいえ、彼らも救いが律法によって得られるとは思っていません、もしそうだとしたら、パウロのことですから、そのような人は「のろわれるべきだ」と言うことでしょう。私たち日本人がキリスト者になった場合、救われてはいるけれども、その育った背景によって、日本のさまざまな因習と慣習、人間関係のしがらみといったことにこだわり、縛られているキリスト者がいます。そのような人が「信仰の弱い人」なのです。

●使徒の働き 10 章では、福音によって新しい神の民が、ユダヤ人から異邦人へと移行して行くその過程の中で、敬神者と言われる人々にも福音が伝えられて行きました。敬神者とは、異邦人でありながら、ユダヤ教に改宗し、その上で福音にふれた人々のことを意味します。彼らは割礼を受けています。あるとき、ペテロはイタリアの百人隊長をしていたコルネリオという人の家に招かれました。しかしその前に、ペテロは不思議なことを経験していました。

【新改訳改訂第3版】使徒の働き 10 章 9～20 節

- 9 その翌日、この人たちが旅を続けて、町の近くまで来たころ、ペテロは祈りをするために屋上に上った。昼の十二時ごろであった。
- 10 すると彼は非常に空腹を覚え、食事をしたくなった。ところが、食事の用意がされている間に、彼はうっとりとして夢ごちになった。
- 11 見ると、天が開けており、大きな敷布のような入れ物が、四隅をつるされて地上に降りて来た。
- 12 その中には、地上のあらゆる種類の四つ足の動物や、はうもの、また、空の鳥などがいた。
- 13 そして、彼に、「ペテロ。さあ、ほふって食べなさい」という声が聞こえた。
- 14 しかしペテロは言った。「主よ。それはできません。私はまだ一度も、きよくない物や汚れた物を食べたことがありません。」
- 15 すると、再び声があつて、彼にこう言った。「神がきよめた物を、きよくないと言ってはならない。」
- 16 こんなことが三回あつて後、その入れ物はすぐ天に引き上げられた。
- 17 ペテロが、いま見た幻はいったいどういうことだろう、と思ひ感っていると、ちょうどそのとき、コルネリオから遣わされた人たちが、シモンの家をたずねて、その門口に立っていた。
- 18 そして、声をかけて、ペテロと呼ばれるシモンという人がここに泊まっているだろうかと思ひ尋ねていた。
- 19 ペテロが幻について思い巡らしているとき、御霊が彼にこう言われた。「見なさい。三人の人があなたをたずねて来ています。
- 20 さあ、下に降りて行って、ためらわずに、彼らといっしょに行きなさい。彼らを遣わしたのはわたしです。」

●ペテロが夢心地に見た幻は、律法によって食べてはならないとされている汚れた動物でした。ところが、ペテロは「さあ、ほふって食べなさい」という主の声に対して、「主よ、それはできません。私はまだ一度も、きよくない物や汚れた物を食べたことがありません。」と答えました。同じやり取りが三度ありました。しかしペテロはその後、コルネリオのところに導かれ、彼らの上になされた神のみわざを見た時、はじめて自分のうちにあったこだわりから解放されたのでした。しかし現実には、ペテロがそうであったように、伝統、慣習、育った環境、受けた教育から解放されることは並大抵のことではないようです。ペテロでさ

え、神の特別な取り扱いが必要であったことを聖書が示しているのですから。

●反対に、信仰の強い人とは、伝統とか、慣習に縛られません。信仰による真理の自由というものを知っていてその信仰の良心に従うことのできる人です。あるいはこういう言い方ができるかもしれません。それは、信仰生活において何が根本的に重要な事柄か、あるいは何がそうではないかを知っている人だということです。パウロは「信仰の弱い人を受け入れなさい。その意見をさばいてはいけません。」と記しています。

●ある教会では、オーバーヘッドを使って歌うのはもってのほか、きちんと製本された讃美歌を持って歌うことにこだわる牧師もいます。聖歌は祈禱会で使ったとしても、礼拝では讃美歌を使わなければならないという先生もいれば、自分が良いと思った賛美をどんどん礼拝の中に取り入れる先生もいます。ちゃんこ鍋のようにいろいろなものを入れてしまう「信仰の強い人」のタイプの先生と言えます。逆に、讃美歌は決して使わない。歌詞が難しくて心に響いてこないで新しい賛美しか用いないという「信仰の弱い人」のタイプの先生もいます。こうした状況では、礼拝のプログラムにおいても何一つ変えることができず、役員会で大問題となってしまう教会もあるのです。

●北海道リバイバル・ミッションの音楽担当においてもさまざまな問題がありました。賛美リーダーの問題、賛美の選曲、宣教大会としての考え方、などなど……。こうした事柄について、実行委員会の四役の先生方と話し合っ、伝統的な教会が少しでも入りやすくするために、彼らが使っている聖歌の中から、良いものを認めて、それをを用いていくという姿勢をなんらかの形で表そうということになりました。それは何のためかと言えば、教会の一致を保つためです。

●パウロはここで、信仰の弱い人、強い人がいることは認めていますが、信仰の弱い人はダメで、信仰の強い人は正しいということは全く言っていない。そのように断定していません。互いに侮ってはいけないうし、またさばいてはならないと勧めています。なぜなら、神がそれぞれを受け入れてくださっているからです。

●2節を文字通りと、「自由に歌ってよいと信じている人もいますが、弱い人は特定の讃美歌、聖歌よりほかに歌いません。なんでも自由に取り入れて歌う人は、特定の讃美歌しか歌わない人を侮ってはいけないうし、特定の讃美歌しか歌わない人も自由に歌っている人をさばいてはいけません。なぜなら、神がそれぞれを受け入れてくださったからです。」と読むことができます。

●キリスト者同志が互いに寛容であるべきことを、パウロは信仰の弱い人、信仰の強い人という表現をしながら教えようとしています。なぜなら、神がどちらも受け入れて下さっているのであり、また神が私たちを立てて下さり、神の深いご計画の中で用いようとしておられるからです。私たちが寛容でなければならない根拠はここにあります。

●多様性の一致ということが言われますが、特に、超教派的な活動においては、それぞれの立場に危険性があります。その危険性は自分たちを絶対化してしまうということです。このことによって、キリストのからだが分裂し、神の栄光が現わされなくなってしまうとしたら、それは悲しむべきことです。自分と意見を同じくしない人々を見下げたりするような高慢な態度をパウロは禁じています。また、こだわりの強い「信仰の弱い人」のタイプは、自分たちの方がきよく、賢いとも禁じています。そして相互に寛容であることが求められているのですが、パウロはとりわけ「信仰の強い人」に対してそれを勧めているのは、知恵のあることだと思えます。

2. 良心の重要性

●パウロはどちらかと言えば、信仰の本質とは関係ない事柄の中で、それぞれ自分の良心の自由と責任をもって判断し、行動することを勧めています。5 節に「ある日を、他の日に比べて、大事だと考える人」(信仰の弱い人)、「どの日も同じだと考える人」(信仰の強い人)に対して、次のように述べています。

【新改訳改訂第3版】ローマ人への手紙 14 章 5 節

ある日を、他の日に比べて、大事だと考える人もいますが、どの日も同じだと考える人もいます。それぞれ自分の心の中で確信を持ちなさい。

●キリスト者であっても、結婚するときに、大安だとか、友引だとか、仏滅にこだわる人がいます。逆に、あるキリスト者は全くそのようなことにこだわることなく、振り回されません。私たち夫婦も結婚式は仏滅でした。だれもその日に反対する者はいませんでした(知らなっただけかもしれませんが)。こうした問題について、聖書はなんら回答を示していません。日々の問題のみならず、お酒やたばこを飲むかどうかということについても、はっきりとした回答は出していません。パウロは愛弟子のテモテに対して、胃のためにぶどう酒を飲むことを勧めています。だからと言って、酒を飲むのは良いことだとするのは極論です。また、牧師がこの世の仕事をすべきかどうかについても、何ら回答を出していません。ある牧師はみことばと祈りに専心するために、他の仕事を持つことは良くないと考えています。福音を伝えることによって、自分の糧を得るべきだと考えています。また、ある人はパウロでさえ天幕を作る仕事をしながら自給伝道をしたのだから、他の仕事をもっていてもおかしくないと考えます。実にさまざまです。しかしパウロはこう述べています。「**それぞれ自分の心の中で確信を持ちなさい。**」と。

●私自身はみことばのためにいのちをかけるために、他の仕事、それもお金を得ることのために働くことは良くないと考えていました。また東京にいる時、ブライダルの働きをもちかけられたとき、最初ははっきりと断ったほどです。ペテロのように「私はまだ汚れた物を食べたことはありません」という心境でした。ところが開拓伝道で北海道に来て、再度、ブライダルの働きへの依頼が来た時に私の考えは揺らぎました。ただそこで問題となったのは、自分の中に確固とした確信をもってやるかどうかということでした。

●現在、私が心の中で確信を持っていることは、「主のためなら、大いに儲けよ。そしてそれを大いに主にささげよ」ということです。これはジョン・ウェスレーの考え方でもあります。北海道リバイバル・ミッションで忙しくしていますが、何の儲けにもなりません。むしろ出ていくことのほうが多いのです。しかし、主はその必要を満たしてくれています。母の仕事関係で運転の働きをしなければならないのですが、正直、かなりきついところがあります。この世はすべて金次第と言いますが、主のために何かをするためには、やはり経済的な必要が伴います。しかし私はお金の奴隷になってしまうとしたら、牧師を辞めなければなりません。お金のために働くのではなく、お金を得て、それを主のためにささげて生きるという確信をもってやっているのです。

●私自身としては、純粹にみことばと祈りに徹しておられる牧師先生を心から尊敬しています。またひとつのことにのみ打ち込めることにはうらやましさを感じます。しかし、「それぞれが自分の心の中で確信を持つ」ことが必要なのです。他の仕事をもっていない牧師も、持っている牧師も、「主のために」そうしているのです。それぞれが感謝しているのだとすれば、同じ主に献身しているのですから、互いに受け入れ合うことが大切です。

【新改訳改訂第3版】ローマ人への手紙 14章 7～8節

7 私たちの中でだれひとりとして、自分のために生きている者はなく、また自分のために死ぬ者もありません。

8 もし生きるなら、**主のために**生き、もし死ぬなら、**主のために**死ぬのです。ですから、生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のものです。

●太字にあるように、「**主のために**」という目的を持って生きるには自由があります。また責任があります。ですから、私たちは人を自分の基準でさばくことなく、また人の目を恐れて生きるのではなく、自分の良心に従ってそれぞれが確信を持って生きることを学ばなくてはなりません。人がどうのこうのと言うのではなく、自分が確信を持って生きる場所に、本当のキリスト者としての自由があるのではないのでしょうか。確信が持てない時、私たちは人をさばくようになるのではないかと思います。

●私たちはやがて一人ひとり、例外なく、キリストのさばきの座の前に出なくてはなりません。ですから、私たちに人をさばく権利はありません。イエシュアも言われています。「さばいてはいけません。さばかれないためです。あなたがさばくとおりに、あなたがたもさばかれるからです。」(マタイ 7:1～2)と。

●何をやるにしても、主に対する私たち一人ひとりの責任、つまり、良心に従って確信をもって生きることが求められています。私たちがそのように成長していくとき、互いに寛容さをもって接することができるのではないのでしょうか。教会が多様性を持ちながら、御霊の一致を保つように心掛けていきたいと思われされます。

1995.6.25